

LINE において 4 種類のネガティブ感情が生じる時間

～ 返信の待ち時間に関する LINE メール依存度による比較 ～

加藤由樹^{*1}, 加藤尚吾^{*2}, 小澤康幸^{*3}

*1 相模女子大学, *2 東京女子大学, *3 明星大学

Effects of LINE Dependency on Times Until Negative Emotions Occur While Waiting for a Reply in LINE Communication

Yuuki Kato^{*1}, Shogo Kato^{*2}, Yasuyuki Ozawa^{*3}

*1 Sagami Women's University, *2 Tokyo Woman's Christian University, *3 Meisei University

女子大学生 213 名を対象にして、LINE で 4 タイプの相手（「家族や親類」「恋人や恋愛感情を抱く人」「友人」「バイトの上司やサークルの先輩などの年上の人」）に返信を求めるメッセージを送信したとき、「すぐに既読状態になったが返信がない場合」と「未読状態のままで返信もない場合」において、送信者に 4 種類のネガティブ感情（悲しみ、不安、怒り、罪悪）が生じるまでの返信の待ち時間に関して LINE メールへの依存の程度の影響を検討した。結果は、LINE メールへの依存の程度によって差が見られるのは「家族や親類」以外の 3 タイプの相手の場合であることを示唆した。

キーワード: LINE, 返信スピード, LINE メール依存, コミュニケーション

1. はじめに

これまで、筆者らは LINE アプリケーションのメール（「トーク」と呼ばれている、以下 LINE と略す）における返信スピードに注目して研究を行ってきた。モバイル端末で用いられるテキストメッセージングは、PC メール時代とは異なり、使用者に返信のスピードを要求する。⁽¹⁾⁽²⁾ 特に、LINE には、送信したメッセージを受信者が読んだことを送信者に自動的に通知する既読の通知機能（逆に読んでいない場合は未読が通知される）があり、LINE の使用者はこれまでの主流であった携帯メール以上に返信のスピードを求められている。⁽³⁾⁽⁴⁾ 筆者らはこれまでの文字ベースのコミュニケーション研究を通して、テキストメッセージングでの返信スピードは、モバイルコミュニケーションにおいて伝達される非言語の手がかり（nonverbal cue）のひとつと位置付けて研究を進めてきた。

また、スマートフォンの普及によって私たちの日常が便利になった反面、様々な問題もある。代表的な問題はスマートフォンやインターネットへの依存である。

日本の高校生を対象にした総務省（2014）の調査では、男子高校生よりも女子高校生の方がソーシャルメディアの利用時間が 2 倍近く長く、またネット依存の高い高校生の方が低い高校生よりもソーシャルメディアの利用時間が長くネット依存の高低間に大きな開きがあることが報告された。⁽⁵⁾ この調査から、若者のインターネットを用いたコミュニケーションとネット依存には関係があることが考えられる。

本研究では、LINE で 4 タイプの相手に返信を求めるメッセージを送信したとき、「すぐに既読状態になったが返信がない場合」と「未読状態のままで返信もない場合」において、送信者にネガティブ感情が生じるまでの返信の待ち時間に関して LINE メールへの依存の程度の影響を含めて検討した。

2. 方法

2.1 調査時期と参加者

221 名の女子大学生を対象に質問紙調査を 2017 年 6 月に実施し、213 名（平均年齢 18.67 歳、レンジ 18-

22 歳) から有効回答を得た。

2.2 4 種類の感情の生じる時間の測定

質問紙では、やりとりの相手に対して返信を求める LINE のメッセージを正午に送ったとき、すぐに既読状態になったが返信がない状態 (既読条件) と、未読のまま返信がない状態 (未読条件) について、各状態がどのぐらい続くと 4 種類のネガティブ感情 (悲しみ, 不安, 怒り, 罪悪) が生じるかを、4 種類の感情それぞれで測定した。なお、やりとりの相手は、「家族や親類」「恋人や恋愛感情を抱く人」「友人」「バイトの上司やサークルの先輩などの年上の人」の 4 タイプを設定した。各質問項目への回答は 10 段階評定 (選択肢は、①13 時まで、②15 時まで ~ ⑩翌日の正午まで、⑩それ以降) で求められた。

2.3 LINE メール依存の程度の測定

LINE メール依存の測定には、「携帯メール依存尺度 (短縮版)」⁶⁾ を用いた。この尺度では各質問項目の中でコミュニケーションツールが「メール」になっているが、本研究ではこれらを LINE に置き換えた。なお筆者らは、この尺度の使用及び各項目のメールを LINE に置き換えて使用することについて作成者の許諾を得ている。この尺度は「情動的な反応」、「過剰な利用」、「脱対人コミュニケーション」の 3 つの下位尺度から構成され、各下位尺度には 5 項目の質問があり、それぞれ 5 段階評定 (1: 全くあてはまらない ~ 5: 非常にあてはまる) で回答を求める形式である。

3. 既読状態と未読状態の比較

送信者にネガティブ感情が生じるまでの返信の待ち時間に関して、「すぐに既読状態になったが返信がない場合」と「未読状態のまま返信もない場合」の比較に関しては既に報告した。⁷⁾ 主な結果を以下に引用した。

1) 4 タイプの相手すべての場合に、既読条件において、4 種類のネガティブ感情すべてが未読条件よりも有意に短い時点で生じる。2) 既読条件において、やりとりの相手が「友人」の場合を除く他の 3 タイプの相手の場合に、メッセージを送信したその日の内 (選択

肢「⑦深夜 1 時まで」までを就寝前とした) に相手からの返信がないと不安が生じる。3) 未読条件において、やりとりの相手が「家族や親類」「恋人や恋愛感情を抱く人」の場合は、その日の内に相手から返信がないと不安が生じる。4) 既読条件において、やりとりの相手が「恋人や恋愛感情を抱く人」の場合は、その日の内に相手から返信がないと悲しみが生じる (加藤, 小澤, 加藤 2017)。

4. 結果

LINE メール依存の程度による参加者の群分けのために、参加者ごとに各下位尺度の平均値を計算し、これらを変数としたクラスター分析を行った。その結果、彼らは 2 つのクラスターに分けられた。これらを LINE メール依存度の高群 (n = 119) と低群 (n = 94) とした。

既読条件及び未読条件における 4 種類のネガティブ感情が生じるまでの返信の待ち時間を LINE メール依存二群間で比較するために、4 タイプの各相手においてマン・ホイットニーの U 検定を行った。その結果、感情によっては有意差や有意傾向が見られた。主な結果は以下の 5 点であった。1) 両条件の 4 タイプの相手すべての場合に、LINE メール依存高群の方が低群よりも早い時点で生じる感情がほとんどであった。2) LINE メール依存二群の間に有意差が見られなかった感情は、「家族や親類」が相手の場合に集中しており、既読条件では「悲しみ」「不安」「怒り」の 3 件、未読条件では「不安」の 1 件であった。その他の相手では、「バイトの上司やサークルの先輩などの年上」が相手の場合であり、未読条件における「不安」の 1 件のみであった。3) 「友人」が相手の場合を除く他の 3 タイプの相手の場合は、既読条件においては LINE メール依存両群、未読条件においては LINE メール依存高群がその日の内に返信がないと「不安」が生じる。また、未読条件の LINE メール依存低群は翌朝まで (中央値が「⑧翌朝まで」) に返信がないと「不安」が生じる。4) 「友人」が相手の場合は、既読条件において LINE メール依存高群はその日の内に返信がないと「悲しみ」「不安」を生じる。また、未読条件において LINE メール依存高群は翌朝までに返信がないと「不安」が生

じる。5)「バイトの上司やサークルの先輩などの年上」が相手の場合に、既読条件において LINE メール依存高群はその日の内に返信がないと「悲しみ」が生じる。

なお、本原稿では4種類の感情が生じるまでの時間の感情間の統計的な比較の結果については割愛した。

5. 考察

既読条件、未読条件それぞれにおける4種類のネガティブ感情が生じるまでの返信の待ち時間に関する LINE メール依存二群間の比較の結果から、ほとんどのケースで LINE メールへの依存の程度の高い人の方が低い人よりもネガティブ感情が生じるまでの返信の待ち時間が短いことが明らかになった。しかし、相手によっては、LINE メールへの依存の程度の違いによって待ち時間に差が見られない感情があることも明らかになった。すなわち、「家族や親類」が相手の場合は、既読状態では悲しみ、不安、怒り、未読状態では不安が生じるまでの待ち時間に LINE メールへの依存の程度は関係がない。同じく、「バイトの上司やサークルの先輩などの年上」が相手の場合は、未読状態において、LINE メールへの依存の程度は不安が生じるまでの待ち時間に関係がない。身内からの返信の待ち時間に生じるネガティブ感情は、常に安定した強い関係の相手から返信がないという不安定さを、特別な相手の異常な事態に関連させた推察によって喚起されるため、LINE メールへの依存の程度による影響がほとんどないと考えられる⁽⁷⁾。相手が年上の場合の未読状態において不安が生じる時点で LINE メールへの依存の程度の違いによって差がないことに関しても、事務連絡の未確定の状態が続くことによって不安になることが原因であると考えられる⁽⁷⁾。特に、未読状態においては、相手が読んでいないということがわかるわけであり、全員に同じように不安が生じると思われる。つまり、このような状況で不安が生じることは、LINE メールへの依存の程度とは関係がないということである。しかし、年上の相手の場合には、既読状態において、悲しみの生じる時点で LINE メールへの依存の程度によって違いがあり、依存の程度の高い人はその日の内に生じ、低い人は翌日の午後以降（中央値が「@それ以降」）に生じる。以上より、LINE メールへの依存の程

度によって差が見られるのは「家族や親類」以外の3タイプの相手の場合であると考えられる。

謝辞

本研究は、科研費 15K01089, 15K01095 の助成を受けて実施しました。感謝いたします。

参考文献

- (1) Kato, Y., Kato, S., & Chida, K. : Reply timing as emotional strategy in mobile text communications of Japanese young people: focusing on perceptual gaps between senders and recipients. In J. E. Pelet & P. Papadopoulou (Eds.), *User Behavior in Ubiquitous Online Environments*, (pp.1-18). Hershey, PA: IGI Global (2013)
- (2) Kato, Y., & Kato, S. : Reply speed to mobile text messages among Japanese college students: When a quick reply is preferred and a late reply is acceptable. *Computers in Human Behavior*, 44, pp.209-219 (2015)
- (3) 加藤尚吾, 加藤由樹, 北澤武, 宇宿公紀: LINE におけるネガティブ感情が生じるまでの返信の待ち時間と LINE への依存度との関係～未読状態と既読状態に注目して～. 日本教育工学会第 32 回大会講演集, pp.317-318 (2016)
- (4) 加藤由樹, 小澤康幸, 加藤尚吾 : LINE メールにおいて速い返信が求められる状況に関する大学生を対象にした調査. 日本情報科教育学会第 10 回全国大会講演論文集, p.145 (2017)
- (5) 総務省 : 高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査報告書. (2014)
http://www.soumu.go.jp/main_content/000302914.pdf
(2017年6月9日確認)
- (6) Igarashi, T., Motoyoshi, T., Takai, J., & Yoshida, T. : No mobile, no life: self-perception and text-message dependency among Japanese high school students. *Computers in Human Behavior*, 24(5), pp.2311-2324 (2008)
- (7) 加藤由樹, 小澤康幸, 加藤尚吾 : LINE における4種類のネガティブ感情が生じるまでの返信の待ち時間～既読状態と未読状態の比較～. 日本社会心理学会 2017 年度第 58 回大会発表論文集, p.323 (2017)